

[研究ノート]

利根川・荒川流域の洪水と「押堀」について

いわゆる「おっぼり」は「落堀」ではなく、「押堀」が本来の用語です（続編）

市川 幸男

1 はじめに

大河川の堤防が洪水で破堤して、その跡にできた深掘れした水たまりの池を国土交通省国土地理院の作成による治水地形分類図の凡例では「落堀」と記載して、読み方を「おっぼり」としている（図-2）が、これについて本来は語源的に「押堀」が地形用語であることを前回の研究報告第14号で述べたところである。

地方凡例録（じかたはんれいろく）などの古文書でも、洪水による破堤地点を「切所（きれしょ）」、破堤後の深掘れの池を「押堀」又は「切所沼（きれしょぬま）」と記載している。

本稿ではその続編として、利根川（小貝川を含む）・荒川流域の洪水と破堤によって形成された「押堀」について、新たに集約した事項・資料等を整理した上で考察したものである。

2 関連地名の具体事例

前回、リストアップした関連地名について、茨城県稲敷市（旧東村）で、新利根川左岸に「押堀」集落とバス停留場で読み方が「おっぼり」であることを現地確認できた。（写真-1、図-1）

その他、「押」の関連地名については、表に集約整理した通りである。（表-1）

3 押堀の具体事例

利根川・荒川流域に存在する「押堀」について、現時点で整理してみた。（図-3、表-2）

これを見てわかることは、徳川家康の江戸入府を機に開始された利根川東遷及び荒川西遷の進展に伴って、利根川・荒川堤防が腹付け嵩上げといった堤防の強化がされればされるほど、いたちごっこ、あるいはもぐらたたきで、関東平野の沖積低地にある堤防は、大洪水が襲来した場合にはどこでも破堤する可能性があり、大水害が繰り返されてきた歴史的事実があるということである。また今後もそのリスクはスーパー堤防にならない限り、常に内在している。

4 国土地理院による「土地条件図」及び「治水地形分類図」における用語解説

国土地理院では市販の「土地条件図」及びホームページ公開の「治水地形分類図」の用語解説で、次のように記載している。

「土地条件図」→「土地条件調査」→「土地条件図における地形分類」→「各地形分類項目の説明」→「・頻水地形（ひんすいちけい） 水防上注意すべき地形や完全な陸ではない土地」→「落堀（おっぼり） 過去の破堤洪水の際に洪水流による浸食でできた堤内地の凹地」。

また、ホームページで公開の「治水地形分類図」でも、

「2. 治水地形分類図に盛り込まれている内容」→「(1) 地形分類項目」→「名称定義」→「落堀 過去の洪水による破堤の際に流水によって浸食されてできた凹地であって池として残っているもの」。次の項目で、「旧落堀 旧地形図あるいは過去の空中写真で認められる落堀で、湿地で残っているもの又は、現在はその原型がわからないもの」。

と定義されている。(図-2)

このような誤用が河川系技術者に浸透してしまったのは前回の研究報告14号で、昭和51年の長良川破堤を契機に、旧建設省が国土地理院を中心として全国各地方の主要な直轄の一級河川流域の低平地を対象に治水地形分類図を作成した際、用語凡例として「落堀」が採択されていたことに概ね行き着いたと記述した。

さらに遡って、昭和34年の伊勢湾台風災害のほんの少し前の昭和31年に作成された現在のハザードマップの走りとなった旧総府府資源調査会(旧科学技術庁→現文部科学省)により作成された「木曾川流域濃尾平野水害地形分類図」に行き着くことも述べた。この図の作成は当時国土地理院に在籍していた故大矢雅彦早稲田大学名誉教授を中心として実施された調査業務である。伊勢湾台風の浸水区域がこの図のデルタ区域とほぼ一致していたことで、一気に社会的な評価が認められた。昭和35年から「水害予防対策土地条件調査」が実施されて、その後故大矢名誉教授を中心に全国の多くの水害地形分類図が作成された。故大矢名誉教授は地理学者として水害地形に関する研究分野で大変著名である。

この故大矢名誉教授の編著の「水害地形分類図集 全7巻」がつくば市にある独立行政法人防災科学研究所の自然災害情報室で閲覧公開されている。当職はつくば市に

出向いた折、これらの資料の図中の凡例を確認してきた。

この結果、資料によって「押堀」と「落堀」が混在していることを確認した。具体例として、中部の庄内川下流や近畿の淀川の資料では凡例が「落堀」に、関東の荒川上流の資料では凡例が「押堀」に採用されていた。

5 押堀の形状について

押堀の図や写真を見てお気づきのことと思われるが、押堀には大きく2つのタイプがあることがわかる。ひとつは丸池の形状(多くは楕円形)になるもので、池の名前にも「丸池」(昭和51年の長良川破堤の誘因になったとされる池で、古文書で江戸時代に存在していたことが証明された押堀の池)などがある。茨城県竜ヶ崎市の小貝川左岸高須地先(飛び地のため、取手市(旧藤代町)に所属)から下流部の左岸側に大正時代末期まで大きく蛇行していた旧河道があり、その左岸下流部側から利根町の台地に向かって南へ延びている控え堤防際に、明治43年の洪水による破堤跡の「中沼」も扁平な丸い形状であることが図で確認できる。(図-6、写真-7)このタイプは、破堤地点の堤内側の土質が深いところまで軟弱で密度の低い砂層や粘性土層・シルト質層が堆積しているケースで、例えて言えば滝の落下で滝壺が深く掘れていくイメージである。特に関東地方の沖積低地で縄文海進の時期に海面下だったエリアは、その前の最後の氷河期に深いところまで古渡良瀬川(仮称)や古鬼怒川(仮称)の流れによって浸食されて谷底平野の深さまで沖積軟弱地層となっているため深く掘れやすい。埼玉県幸手市の高須賀池はまさに古渡良瀬川の川筋にあり、推定で約30mの深さまでが沖積地層である。この高須賀池は、天明3年(1783)の浅間山の大噴火後、天明6年(1786)の利根川

大洪水によってできたものであるが、最大深さは6 mに及んだ。(写真-6、図-7)他にも利根川・荒川流域における押堀の事例はこのタイプが多い感じである。(我孫子市の梶池 写真-8、春日部市の薬師沼 写真-9、久喜市(旧栗橋町)の宝治戸池 写真-11)

これに対して、昭和22年のカスリーン台風の洪水による利根川右岸の新川通り地先の越流破堤の押堀は、いわゆるロケットの噴射火炎の形状をしている。(写真-2、3、図-4)その長さは1 kmにも及んでいる。破堤の際、堤内側との水位の比高差が大きく、洪水流の勢いが非常に強かったため、深さは7 mにも及んだとされている。このタイプは地表面にやや密度の低い軟弱な沖積地層(砂層・粘性土層・シルト質層)があり、その下部に比較的固い洪積地層(固結した土丹層など)や玉石・礫・砂利などがアーミング(鎧状態で面的に固まっている)している地層がある場合に形成されるとした論文がある。

『木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史』(2006年度佛教大学大学院日本史学専攻の科目『地誌学』における水害環境及び水害資史料の分析結果)によると、p3~p4にわたって、堤内池沼の分布の項で、

・・・両河川の流路沿いに多数の堤内池沼が存在していた。これらは地元でふち(淵)と呼ばれており、成因的には河川の洪水氾濫と密接に関連する地形と考えられる。・・・その成因として、A:洪水時の浸食によるおっ堀(切れ所池)、B:内水の排水不良や堤下からの漏水による湛水、C:旧流路の残存、・・・に分類した。・・・(p4)・・・Ⅲ地区:宇治川左岸の宇治から向島間で、浸食性のおっ堀に起因するものが多い。③上流の宇治・槇島地区には方向性をもつ細長いもの、下流の向島地区には円形のものが多い。この差異については、池

田他の細長い形態は地表下の洗掘されやすい軟らかい地層がうすい場合には波状跳水により洗掘深は浅く、逆に洗掘されやすい地層が厚いともぐり噴流が生じて水深の大きなおっ堀が形成されるという実験結果(注1)が参考になる。④宇治川左岸には形成年代が推定できる例がある。『槇島村洪水絵図』は、1868(慶応4)年のお釜切れの状況を描いていると推定される。絵図の破堤状況から、宇治橋下流のUL2、3、4およびUL9(注2)がこの際に形成されたおっ堀とみられる。木津川では城陽市富野のKL14(六ヶ池)は1846(弘化3)年および1852(嘉永5)年の破堤、同市寺田のKL17は1859(安政6)年の破堤により形成された可能性が高い。・・・

と記述されている。

(注1) 文中の池田他の論文:『おっ堀の形状に関する模型実験』(池田宏、伊勢屋ふじこ・三谷靖)筑波大学水理実験センター報告 6号 1982年 p118

(注2) 文中のULは宇治川左岸、KLは木津川左岸の略号。右岸はR。

昭和56年の小貝川下流部左岸高須地先の破堤による押堀もロケットの噴射火炎の形状である。(写真-4、図-5)昭和61年の小貝川中流部左岸の筑西市(旧明野町)赤浜地点の越流破堤による押堀は丸池とロケット噴射火炎型のやや中間的な形状に見える。河川堤防の法尻ラインが直線であるので、本稿では便宜的に「砲弾型」と表現する。(写真-5)おそらく、破堤直後は楕円形あるいはロケット噴射火炎型いずれかを呈していたと考えられる。熊谷市大里小泉地先の切所沼も斜めだが、概ね砲弾型に見える。(写真-13)

これらに対して、小貝川中流部右岸の常総市(旧石下町)本豊田地先の漏水破堤地点は従前からあった農業用水取水樋管から

続く用水路断面により、主たる流れがこの水路断面に従って流れたためか、押堀の形成はなかったようである。

6 「落堀」について

前回の研究報告14号で比較検討した「落堀」（おとしぼり、あるいはおちぼり）に関して、次の事例があった。

二級河川 落堀川（おちぼりがわ）

新潟県北部にある日本海に注ぐ河川で、かつて紫雲寺潟の干拓のために形成された排水路。

一級河川 落堀川（おちぼりがわ）

江戸時代に大阪の大和川が堺方面に河道を付け替えられた際、狭山池方面から流れ出る東除川などの流入支川に大和川の洪水が逆流しないように、大和川への合流点を引き下げするために、大和川左岸に沿って平行に南側へ開削された付け替え河川のひとつで、東除川と合流する二次支川。

7 「おっぼり」の他の語源説について

利根川に関するある写真集書籍の中で、「おっぼり」の語源由来について、

・・・新利根川には「押堀（おっぼり）」という地名がある。オッポリとは古語で、語源は乱れ髪のことを“オッポロ髪”といった。女性の乱れた髪のように水が流れ広がる様を表わし、どちらも「切れどころ」をいう。過去の水害多発地に残っている。・・・

と記述されていた。

これに関して、各種の古語辞典を調べたが、当該の項目語句に行きあたらなかった。その代わりに、「日本国語大辞典」〔縮刷版〕第二巻（小学館）を調べてみたところ、「おっぼろ」の項目語句が掲載されていた。

「おっぼろ」 名詞・形容動詞 髪が乱れ垂れていること。また、そのさま。

《方言》女の髪の乱れていること。大分県。《おっぼり》熊本県玉名郡「おっぼろがみ」 名詞 乱れて垂れた髪。

ところが、同じ大辞典の同ページ・同段のわずか3項目前に、なんと「押堀」（おしほり）の内容が掲載されていたのである。

「おっぼり」 名詞 《方言》①田の水口の下で深くなっているところ。千葉県夷隅郡 ②堤が破れて掘れた池。埼玉県入間郡、千葉県東葛飾郡。

まさに、この②が今回の結論そのものである。千葉県にも埼玉県にも共通して使用されていることが確認できた。

また、前号で当職は音便の観点から「押堀」（おしほり）→（おっぼり）となったことを述べたところである。

もし、仮に「おっぼろ」から「おっぼり」に変わってきたとした場合、母音の発音で〔o〕の音から〔i〕の音に変化したということになるが、口の形の動きが不自然な変化であり、他の各種の音便例を勘案すれば、「おっぼろ」語源説は否定されるものであることは理解できると思われる。

なお、同大辞典では、元の押堀について次のように解説されている。

「おしほり」【押堀】 名詞 暴風、水害などによって、田に多量の水が入ったり、畑が水没したりしてできる大きな水溜まり。*地方凡例録-6 「つつみ口田地の内、押ぼりに成、又は川溝すじより風雨のとき大水あふれ」

「おしほりびき」【押堀引】 名詞 江戸時代の免租の一つ。押堀（おしほり）の被害が大きくて、収穫が不可能な場合に、その土地の租税を免ずること。*地方凡例録-6 「押堀引 是はつつみ口田地の・・・大水あふれ、水勢強く所々ほれ入、水溜りに成、急に難起返分、押ぼりびきと申し、たかうちびきになるなり」

これは、洪水によって田畑が深い池にな

ったところでは耕作ができず、収穫が見込めないことに対して免税措置が取られることで、現在の年度末確定申告の災害控除に相当するものである。“たか”は“石高”の意味であろう。押堀の場所にあった粘性土質やシルト質の耕作に適した細粒土砂は濁流となって後背低地や下流に流されてしまい、これに対していくらか粒の粗い土砂は直近の下流付近や周囲にうず高く砂山となって堆積する。これが自然堤防であり、「押砂」、「砂押」、「砂入」等の地名となっている。

なお、古文書の「地方凡例録」の「地方」は“じかた”と読み、「地方巧者」（じかたこうしゃ）とは江戸時代の主に河川普請や農業土木分野における土木技術職の役人の呼称である。

8 今後について

国土交通省を含む河川系技術者は、業務の中で多用する治水地形分類図により、堤防の破堤跡にできる深い水たまりについて「落堀」と呼称・表記することがほぼ慣用的に染みついでしまっている。小貝川破堤に伴う災害復旧記録や旧建設省土木研究所など各種調査報告書でも「落堀」の記載表記がほとんどである。

また、東海豪雨による新川堤防の破堤災害に対する裁判の判例の文中に、間違った「落堀」の用語が使用されており、法律的に厳密であるべき判例用語がこのように不正確なままであるのは決して好ましいことではないと考えられる。

そのため、今後いろいろな機会等でこれを解消し、「押堀」が正解であることを広く周知し、誤解を解消できるように資料をとりまとめさらに取り組んで参りたい。

参考文献

フカダソフト「きまぐれ旅写真館」ホームページ 第7回関東地方の川 埼玉県

<http://www.geocities.jp/fukadasoft/>

国土交通省国土地理院公式ホームページ

『治水思想の風土—近世から現代へ—』
（伊藤安男著 古今書院）1994年
（千葉県立関宿城博物館所蔵書籍）

『広辞苑』第四版（新村出編 岩波書店）
1997年 第6刷

『小貝川災害復旧記録』（社団法人関東建設弘済会発行）2009年3月

『アトラス水害地形分類図』（大矢雅彦
早稲田大学出版部）1993年

『河川地理学』（大矢雅彦 古今書院）1993年

『河道変遷の地理学』（大矢雅彦 古今書院）2006年

『自然災害を知る・防ぐ』（大矢雅彦 古今書院）1989年

『地形分類図の読み方・作り方』（大矢雅彦 古今書院）1998年

『地形分類の手法と展開』（大矢雅彦 古今書院）1983年

『利根川 — PHOTO TOPOGRAPHY 』（堀内敬一 ティービーエス・ブリタニカ）1995年

論文『木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害』（植村善博 他）（京都歴史災害研究 第7号 2007 p4）

論文『おっ堀の形状に関する模型実験』（池田宏、伊勢屋ふじこ）（筑波大学水理実験センター報告 6号 1982年 118ページ）

千葉県立関宿城博物館 所蔵書籍資料

『地方凡例録』（じかたはんれいろく）

国土交通省利根川上流河川事務所提供資料

国土交通省利根川下流河川事務所提供資料

国土交通省下館河川事務所提供資料

国土交通省江戸川河川事務所提供資料

『日本国語大辞典』（縮刷版）第二巻（小学館）第一版 1979年 p645

など、その他各種関係資料の多数箇所から参考引用（詳細省略）

（いちかわ・ゆきお 当館展示協力員）

表-1 「押」に関連する地名

地名表記	よみかた	所在地	河川堤防との位置関係	現地状況	備考
押堀	おっぼり	茨城県稲敷市(旧東村)	新利根川左岸	バス停留所あり	写真-1,図-1
押切	おしきり	茨城県取手市(旧藤代町)	小貝川右岸		
押切	おしきり	千葉県市川市行徳	旧江戸川左岸		
押付	おしつけ	茨城県利根町	利根川左岸	新利根川の 締め切り地点	
押付	おしつけ	千葉県栄町	利根川右岸(将監川左岸)		
押付	おしつけ	千葉県本埜村	印旛沼長門川左岸		
押砂	おしずな	茨城県稲敷市(旧東村)	利根川左岸		
押戸	おしど	茨城県利根町	旧小貝川右岸		
押垂	おしだり	埼玉県東松山市	荒川水系都幾川		フカダソフトより

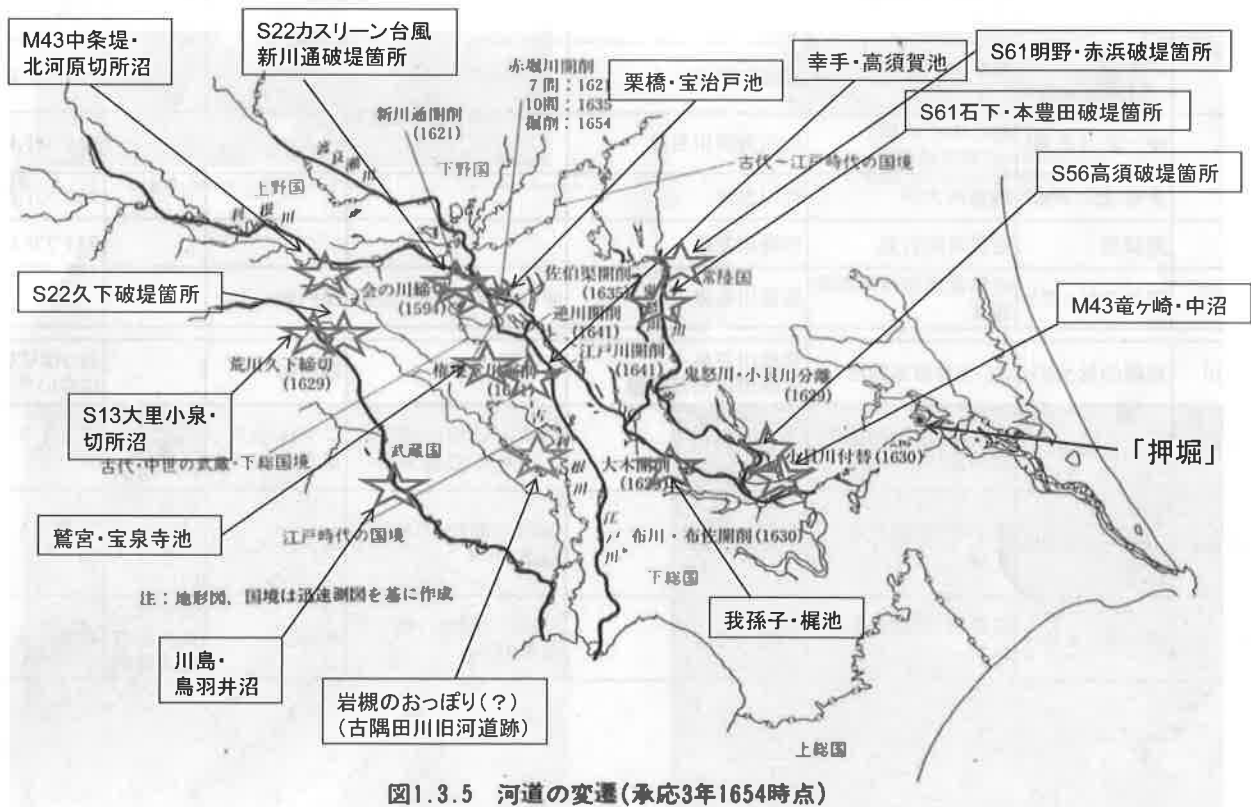


図-3 利根川東遷・荒川西遷(河道代替)と主な破堤箇所・押堀位置

表-2 押堀一覧表

(平成23年1月現在で集計整理)

流域区分	押堀の名称	所在地	河川・堤防との位置関係	形成年次、洪水名称	形状・大きさ等	深さ	備考
利根川	高須賀池	幸手市高須賀	中川右岸	1786(天明6年)洪水、1947(カスリーン洪水で北側が再度洗掘)	ひょうたん型	6m	写真-6 図-7
	中沼	竜ヶ崎市北方	旧小貝川蛇行流路南側控堤	1910(明治43年)洪水	楕円形	13m	写真-7 図-6
	梶池	我孫子市日の出	利根川右岸旧流路右岸		楕円形		写真-8
	薬師沼	春日部市赤沼	大落古利根川左岸		楕円形		写真-9
	宝泉寺池	加須市(旧鷲宮町)八甫(はっぼう)	中川右岸 鷲宮砂丘	1704(宝永元年)洪水			写真-10
	宝治戸池	久喜市(旧栗橋町)北栗橋	利根川右岸・古利根川旧河道左岸	1742(寛保2年)洪水	楕円形		写真-11
	内池	久喜市(旧栗橋町)狐塚	中川左岸	1786(天明6年)洪水			
	切所沼(きれしよぬま)	熊谷市(旧妻沼町)北河原	中条堤法尻	1910(明治43年)洪水	砲弾型		
	行人沼(ぎょうにんぬま)	板倉町	谷田川			8m	
	八幡沼	加須市(旧北川辺町)	合の川				
	五郎兵衛沼	熊谷市上中条	福川旧河道右岸				フカダツタより
	吉次押堀	千葉県本埜村	印旛沼北側		楕円形		
	丸池	稲敷市(旧東村)					
荒川	鳥羽井沼	埼玉県川島町	市野川右岸法尻			3個の池に分散	写真-12
	切所沼(きれしよぬま)	熊谷市(旧大里町)小泉	荒川右岸法尻		砲弾型		写真-13
	切所沼(きれしよぬま)	東松山市上押垂(おしだり)	都幾川左岸				フカダツタより
	鏡ヶ淵(中の淵)	熊谷市小八林(こやつばやし)	和田吉野川右岸				フカダツタより
	長淵(既に消滅)	鴻巣市大芦	荒川左岸				フカダツタより
	諏訪沼	吉見町南吉見	市野川左岸				フカダツタより
木曾川	勝賀のおっぼり	岐阜県海津市平田町勝賀	長良川右岸	昭和27年ダイアナ台風	楕円形		
利根川	岩槻のおっぼり	さいたま市岩槻区	元荒川左岸・古隅田川旧河道跡		楕円形		おっぼりではない?
利根川	新川通破堤	加須市(旧大利根町)新川通	利根川右岸	1947(昭和22年)カスリーン台風洪水	ロケット火炎型長さ1km	現在は新川通スーパー堤防	写真-3 図-4
利根川	小貝川高須破堤	取手市(旧藤代町)高須	小貝川左岸	1981(昭和56年)台風15号	ロケット火炎型	現在は堤防側帯(そくたい)	写真-4 図-6
利根川	小貝川赤浜破堤	筑西市(旧明野町)赤浜	小貝川左岸	1986(昭和61年)台風10号	砲弾型	現在は小貝大橋取付道路部	写真-5



図-1 茨城県稲敷市にある「押堀」地先。新利根川左岸。



写真-1 新利根大橋左岸の堤防天端の「押堀(おっぼり)」バス停。



図-2 治水地形分類図の凡例「落堀」と表記されている。



写真-2 カスリーン台風・東村地先破堤地点空中写真 (米軍撮影:利根川上流河川事務所提供)



写真-3 カスリーン台風の利根川通りの破堤箇所にできた「おっぼり」(旧東村、現在加須市新川通地先)長さ1km。(米軍撮影:利根川上流河川事務所提供)



図-4 治水地形分類図 カスリーン台風による新川通破堤箇所の「おっぼり」跡(長さ1km、ロケット火炎型)



写真-4 昭和56年小貝川左岸高須地先破堤の「おっぼり」(ロケット火炎型) 写真:利根川下流河川事務所提供

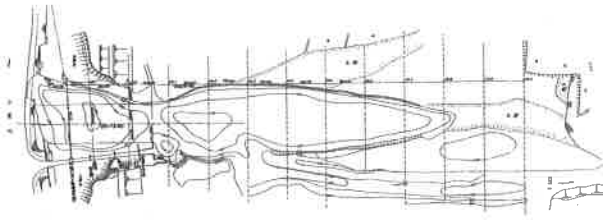


図-5 昭和56年8月(台風15号)小貝川決壊口及び「おっぼり」平面図。長さ140m

出典:『昭和56年8月 洪水(台風15号) 小貝川高須決壊記録誌(昭和16年3月)』

図:利根川下流河川事務所提供



写真-5 昭和61年小貝川洪水・明野赤浜地先破堤の「おっぼり」

破堤延長は85m。形成された「おっぼり」は砲弾型。

写真:下流河川事務所提供



写真-6 高須賀池:埼玉県幸手市高須賀地先

天明3年(1783)浅間山大噴火後の天明6年(1786)天明の洪水で形成された。昭和22年(1947)カスリーン台風の新川通の破堤氾濫流で再度被災。中川の南側。



写真-7 中沼:茨城県竜ヶ崎市北方町地先

明治43年(1910)の洪水で形成された。東西に扁平な楕円形。水深は13mとかなり深い。小貝川旧河道蛇行区間の南側控え堤。



写真-8 梶池(かじけ):利根川右岸 千葉県我孫子市日の出地先
形成年次は不明。「レストランかじ池亭」の敷地内部にある。NEC我孫子事業所の東側。



写真-9 薬師沼:埼玉県春日部市赤沼地先

形成年次は不明。大落古利根川の左岸側。国道4号バイパスの西側。



写真-10 宝泉寺池(ほうせんじいけ) 埼玉県久喜市(旧鷲宮町)八甫(はっぼう)
江戸時代中期の宝永元年(1704)の洪水で形成された。中川の南側。



写真-11 宝治戸池(ほうじといけ) 埼玉県久喜市(旧栗橋町)栗橋北地先
江戸時代中期の寛保2年(1742)の洪水で形成。(フカダソフトによる)古利根川旧河道の左岸側。利根川上流河川事務所の近傍。



写真-12 鳥羽井沼(とばいぬま) 埼玉県川島町鳥羽井地先
江戸時代後半期の安永年間(安永9年?1780年頃)の洪水で形成された。市野川右岸。川島大囲堤の一部を形成。



写真-13 切所沼(きれしよぬま) 埼玉県熊谷市(旧大里町)小泉地先
昭和13年洪水で破壊して形成された。洪水死者13人。近くのお寺に慰霊碑がある。荒川右岸。かつて直上流に旧久下橋(冠水橋)があった。



図-6 小貝川高須地先破堤地点と中沼の位置

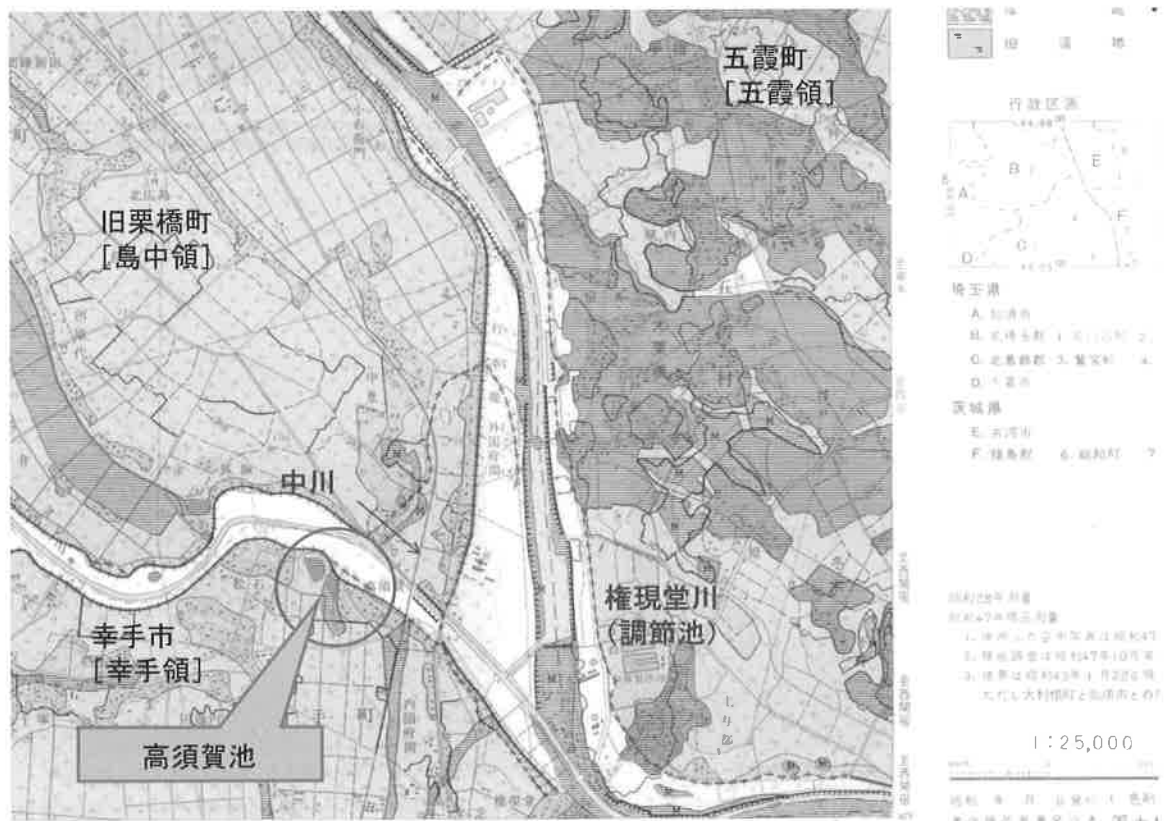


図-7 高須賀池付近の治水地形分類図 埼玉県幸手市地先の「おっぼり」



図一八 迅速測図・利根川栗橋付近 宝治戸池位置図